くらしナビ　ライフスタイル

現役医師 心の葛藤浮かび

がん社会はどこへ
第1部 迷える患者たち
反響特集 上

連載「がん社会はどこへ」の第1部「迷える患者たち」（2月10日から6回）では、がん患者と医師の意思疎通の難しさや、患者がどうすれば正しい情報を得ることができるのかを探った。連載に対して、患者や医療関係者を含む多くの読者から反響が届いた。現役医師による記事への意見なども含めて2回にわたって紹介する。

●「同意書」に異論

読者から特に多くの意見や感想が寄せられたのは連載1回目だ。初期の乳がんを告知された玲子さん(68)＝仮名＝が公立病院の主治医に「手術を選択しない」ことを告げると、「今後、当院では乳がんに関する治療を一切受けない」との同意書にサインするよう求められたことを取り上げた。

これに対し、高知市の「近森病院」の臨床工学部部長、近森正昭さん(63)からメールが届いた。「インフォームドコンセント（十分な説明に基づく同意）のあり方を考えるべきでは」とあった。近森さんを訪ねた。

近森病院は救命救急センターにも指定され、長年、地域医療の中核を担い、全国から医療関係者が視察に訪れるという。

近森さんは、記事の同意書について「医師の『私は診ません』という宣言書でしかなく、単なるわがままです。やってはいけないこと」と断じる。その一方で、「医者は『感情労働』です。常に患者の生死に直面していて、感情を使い果たしてしまう」と、医師という仕事の難しさを指摘する。感情労働とは、頭や体だけでなく、感情が労働の多くを担う仕事のことで、医療者はその代表という。

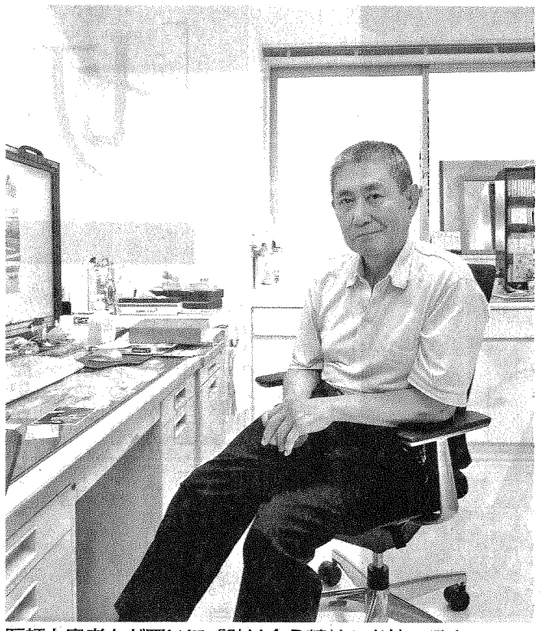
近森さんは、患者への説明について「医療コンシェルジュやソーシャルワーカーが担当したほうが合理的で患者も質問しやすい。ただ、やはり診断した医師が説明すべきだとの考えも根強く、それなら医師の仕事量を減らす必要があります」と話す。

公立病院では職種間の「壁」が高く、チームで仕事をする環境が整いにくいため、医師の時間外労働が多くなりがちだ。「ただ『頑張れ』、では医師が疲弊するだけ」。私立の近森病院では、従来は医師がこなしていた業務の一部を臨床検査技師ら他の専門家に分担するなどして、医師の負担を減らしている。

さらに、仮に医療がサービス産業だとした場合、多くの医師にとってサービスの対価は「報酬」よりも「喜び」だと話す。病を治すことが一番の喜びだが、がんの場合は不治のケースも多い。それでも患者が治療に納得しながら最期を迎えれば、喜びにもつながるとする。そのために医師は適切な治療を施し、患者側も医療の限界を知る必要がある。

ところが、本来なら穏やかな最期を迎えられるはずなのに、現時点の最善の治療法とされる「標準治療」に納得せず、民間療法のクリニックなどを受診し、結果として悪化して最後に担ぎ込まれる患者も多いという。

「助け合うという精神がなければ、医師も患者もお互いが不幸になります」と近森さんは言葉に力を込めた。


医師と患者とが互いに「助け合う精神」を持つことの大切さを語る近森病院の近森正昭さん＝高知市で

●病院変える選択も

玲子さんの事例を、現場の医師たちは、どう見たのだろうか。

在宅医として兵庫県尼崎市でクリニックを営み、医療問題についての著書も多い長尾和宏さん(56)は「訴訟を起こされる恐怖感もあり、医師が保身を考えるのは自然なこと。ただし、この場合は稚拙なやり方だと感じる」と話す。

「医療の高度化や人員不足で現場が疲弊し、医師個人が心身共に追いこまれる場合が多いことも事実だという。「医者を選ぶのは患者の自己責任でもあります。意思の疎通ができなければ病院を変えることを考えるべきです」

兵庫県内でクリニックを営み、日々がん患者の治療にあたる乳腺外科医(57)は「同意書はやり過ぎにしても、この医師の気持ちは分からなくはない」と話す。「がんの放置」を勧める本などを読み、医療を頭から疑ってかかる患者も少なくないのだ。「患者が悪くなるのをただ見ているのは医者としてつらい。適切な治療を拒否して、助かるはずの命が助からなかった患者さんもいる。こちらの心は折れるばかりです」と声が沈む。

●「信頼」が満足に

また、心療内科医で日本医科大特任教授の海原純子さんは「同意書自体は医療現場でなくてはならないもの」と説明する。手術や検査の前などに医療者側の意図を明示して、患者自身に自覚を促し、理解を求めることが第一の目的だ。

そのためには文書による説明が不可欠で、同意書は、その説明に同意したことを示すものと言える。そもそも記事の玲子さんは「治療に関する十分な説明も受けていない」と感じていた。「患者から命を委ねられ、受け止める医師側は当然、さまざまなストレスにさらされる。そこで自らの心をいかに平静に保つか。医師には人間としての成熟が求められます」

海原さんは「がん患者の治療選択に対する満足度」について調査し、同大付属病院がん診療センター長の久保田馨さんらと2013年、オーストラリアで開かれた「世界肺がん学会」で発表した。それによると、選んだ治療に満足するための第一の要因が「医師への信頼感」だった。

一方、米国の場合は「医師と患者が共同で治療法を決めること」が第一というデータが多いという。医師への信頼感が治療の満足度につながるという結果には、日本人特有の気質が見て取れると海原さんは指摘する。「いずれにしても、患者の話を聞き、受け止める姿勢があることが、医師への信頼感につながるのではないでしょうか」

【三輪晴美、写真も】